ことは明らかだ。また別府駅裏通りに面した別府公園東角の埋没した五輪塔群は、当時の別府村がこゝにあったことを証明する手がかりではなかろうか。

度重なる土石流で埋没した中世の別府は、これから解明していかなければならない問題であるが、その解明の糸口となるのは「久光島」の研究ではなかろうか。

ポスポール（燐）

―えせ役人事件―

入江秀利

万延元年（一八六〇）二月、大分郡乙津村の後藤今四郎宅で、「西洋砲術製薬其外御教授方江戸御役人」福原麟之助が、長崎奉行所同心に逮捕された。さらに、同心は、別府村で小間物商営む日野屋源八をも捕縛して、長崎へ連行した。源八は吟味の末帰国を許されたが、入れ替わりに、倅孫六と宗十郎などの関係者が、長崎奉行所に召喚された。

この事件は、厳しい吟味の結果、別府村の関係者全員が『急度叱り』張本人の福原麟之助は天草へ遠島となって一件が落着した。

当時の国情は、六年前に開国という一大転機をむかえ、開国派と攘夷派の国論が沸騰して、騒然としていた。万延元年といえば、大老井伊掃部頭が桜田門外で水戸浪士に襲われ相果てた年である。

諸藩の藩士は、内に幕藩体制終末期の世情不安と、加えて外憂という極度の緊張感から、西洋の新しい火器やその操法の修得に大きな関心をもっていた。レミントン銃などの元込め銃の撃ち方、大砲の操作など、銃火器の操術はもとより、炸裂力の強い火薬の研究もまた盛んであった。なかでも、自然科学の妙味を盛り込んだ舎密術

（化学）は、火薬の製造という実用的な効果はさることながら、武士・町人を問わず知識層をつよく捉えてやまない妖しい魅力があった。

福原麟之助が長崎奉行に差し出した「申口」や、源八一同が差し出した「乍恐以書付申上口上覚」のなかに、当時の世相の一端をうかがうことができる。

福原麟之助は、米倉下野守の家来内藤登の弟で名を秀松といった。家督にありつけぬ秀松は、縁あって浦賀奉行組同心浅野文蔵の養子となり、名を勇之助と改めた。

やがて、文蔵が病んで御役御免になったので、勇之助は養父の跡目をついで浦賀同心に召し抱えられ、役所勤めをするようになった。

その頃の浦賀は、弘化三年（一八四六）に米国印度艦隊司令長官ビッドルが、嘉永三年（一八五〇）は英国の測量船が、同六年にはペリー提督が来航するなど、黒船が頻繁に出没するようになり、江戸湾の外港として、俄に国防の最前線として注目されるようになった。

勇之助は、黒船を目のあたりにして、彼我の火器の差を身にしみて感じ、西洋流砲術や舎密術の書物を読み耽り、その研究に寝食を忘れるようになった。そのため健康を害し、勤めも物憂くなった勇之助は、暇を願い出たので、浅野家からも離縁されて浪々の身となった。折から風雲急を告げる時勢、勇之助は、浦賀時代に学んだ西洋流砲術や舎密術の伝授をなりわいとして糊口をしのごうと考えた。しかし、いずれの藩の藩主も得体の知れぬ者から、新式銃の撃ち方や火薬の製法などという大それたことを教わろうとする者は、まずなかった。勇之助は名前を福原麟之助と改め、公義の権威をかりて「外国奉行支配西洋流砲術理学舎密術遠国不時教授方」と身分を騙り、もっぱら西日本諸国に売り込んだ。

麟之助は、身分が露見することを恐れ、正面きって藩庁を訪れるのではなく、

「内密御用をも兼ね国々視察中のところ、もし、希望ならば西洋流砲術理学舎密術などご伝授いたそう」と、町方役人を介して密かに藩士に当らせた。やがて、肩書きが功を奏して、なにがしかの謝礼で教授希望の者がぽつぽつあらわれるようになった。

中国筋を南下して長州の毛利、豊前の中津奥平藩と行脚をつづけるうちに、教授方も身につき、謝礼の額もしだいに多くなってきた。

一息入れた麟之助は、万延元年正月の上旬、別府村の湯治宿ひな方に宿をとった。逗留中、松平左衛門尉領分の府内に足を入れ、砲術師範役岩野寿一郎を説いて、十八人の藩士に小銃の調練を教授することになった。寿一郎は、麟之助の舎密術を高く評価して、博学の後藤今四郎を紹介した。麟之助は、今四郎宅を何度か訪れるうちに御用となったのである。

乍恐以書付奉申上口上覚（著者意訳）

一　私は、高三斗八升を所持し、農業の傍ら倅孫六と家内九人で小間物類を商い、渡世いたしております。去申正月上旬、村内の湯治宿ひな方に、西洋流砲術製薬其外教授方江戸御役人福原麟之助様と申すお方が御止宿になり、執心の者へは御伝授くださる由承わりおりました。

その後、府内のお家中にご指南としてお越しなされましたが、同月十八九日頃、ひな方にお帰りになり剣付鉄砲の撃ち方をご披露される由につき、罷り出て拝見しましたところ、噂の通り高名のお方で頼もしく存じました。

源八は、かねてより病身でありますので、製薬や薬法などを伝授いただけないか伺ったところ、実々執心であれば教える旨お許しになりました。倅孫六もともに伝習くださるようお願いし、父子で金百疋づつ持参いたしました。その折、製薬や薬法の書物をお貸しになったので早速写し取りました。

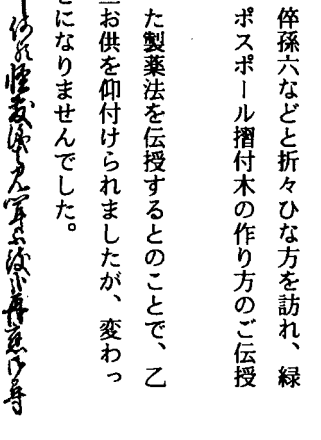
なお又。ポッタアスとか申す薬の製法の手伝いをいたしましたところ、これは治療以外に用いる奇薬故覚えておくようおっしゃいました。

同日廿四日に岡（竹田）表にお越しになった由、製法書を書き写すのみで残念でした。ひなの弟作次郎が岡表に罷り越した折、製法など拝見できないか伺ったところ、砲術稽古の合間に製薬をするとのことで、源八は廿九日夜岡城下に出向き、福原様お宿に

同宿して、宿主源兵衛の頼みで、硝子精にてドントルとか申す物をお拵になる手伝いをいたしました。二月中ごろ迄、倅孫六などと折々ひな方を訪れ、緑礬精・硝子精・ポスポール摺付木の作り方のご伝授を受けました。

その後、変わった製薬法を伝授するとのことで、乙津村などへ再三お供を仰付られましたが、変わった製法はお見せになりませんでした。

一



（読下著者）

一「福原様逗留中　何敗怪敷儀ハ見聞致サズ哉　再応御尋御座候得共　於私共怪敷義見聞仕候儀無御座候　尤」

「ひな方ニテ摺付木御製法後夜ニ入り　ポスポールを手足面部ニ塗リ燈火ヲ消シ御見セ成サレ　御洗落しのタメ二階ヨリ御下り　宅内ニコレ有温泉場エ御出ノ節　家内ノ者ナラビニ入湯仕リ居リ候者共甚ダ相驚キ恐怖仕リ候　右ナドノ者共不思議ノ事ニ存候事ト存奉リ候」

一「硝子薬瓶御入用ニ付　数四ツカト相覚エ　矢田淳小嶋文篤ト申ス両人ノ医師ヨリ借用仕リ差シ上ゲ置キ候」

一「前断申上ゲ奉リ候舎密書写シ取リ候分ハ　去申二月中御当所ヨリ御出役様方エ残ラズ差出シ置候」

（以下略）

右御紀ニ付相違申上ゲズ候　以上

豊後国別府村

源八倅　孫　六　㊞

右　源　八　㊞

差添組頭　勘左衛門　㊞

深夜、燭台一つの暗やみの湯殿に、突然、顔や手足が青白く光る不気味な妖怪変化が下りてきたのだから、入浴者は恐怖におののいたに違いない。これほどこわいことがあろうか。

福原麟之助と、村人との出会いや、係わりについては史料で判断できる。しかし、ここに不思議なことが二つある。

製薬や薬方の書物を写したというが、それを理解できる知識と興味がなければならない筈である。

乙津村の後藤今四郎といえば、大名貸しをする程の豪商である。そのうえ、漢学や国学を修めた教養人で、彼が書いた「大化帳」や「豊後図田帳考証」は地方では名著である。また、南画を田能村竹田に私淑し、号を碩田と称する文人である。

孫六は、別名を橋本竹香といい、碩田と同じく竹田に私淑した画人で、勤皇家長三州とも親交のあった進歩的な革新思想家である。

宗十郎は、茯屋の荒金丘鳥のことで、父呉石と並ぶ豊後きっての俳人である。彼らは、関西の文人墨客との付き合いも広い、風雅な清遊仲間である。

しかも、この事件の当時、碩田は五五才、竹香も丘鳥も、「不惑」の歳にちかい分別盛りである。えせ役人の正体が見えぬ人々ではない。

つぎに、医療法伝授の目的で舎密術の伝授を願ったと口上書にあるが、それもおかしい。彼らが麟之助に用立てたガラス瓶は、医師矢田淳方より借りたものである。

矢田淳は、咸宜園で淡窓に、鳴滝塾でシーボルトに、そして適塾で緒方洪庵に師事した俊才である。安政五年に猛威をふるったコレラが大流行したとき、矢田は、蘭方医学を応用したセニデンハムという薬を作り、近村からひとりの死者も出さなかったという名医である。この矢田淳と昵懇(じっこん)であった源八や孫八が、砲術指南風情から医薬方を学ぶ必要があったろうか。

つまるところ、彼らにとっては、麟之助の正体など問題ではなかったのではなかろうか。えせ役人でもよい、麟之助の舎密術の腕前さえ確かであれば、それでよい。口上書には公義の目をはばかり、表向き医療法伝授を目

的としているが、実は、無機化学がもつ奇妙な魅力が、彼らの知的好奇心をそそったのであろう。勤王の志長三州をかくまった竹香の場合は、密かに後日に期するものがあったのかもしれない。

この事件は、幕末という時流に乗じて起こったものである。目新しきものと権威に弱きことは今も昔も変わりない。

註

Phosphor（独）は燐の総称である。暗所で燐光を発するものは黄燐である。これは、猛毒であるうえに摂氏六〇度で激しく燃焼する。摺付木（黄燐マッチ）として利用されたものであろうが水に溶けにくいので、温泉で洗って落とす事ができたか疑問である。

硝子精は、硝酸カリウムの鉱物名である。これは、酸化性がつよく黒色火薬に用いられる。ドントルとは火薬の語呂合わせであろうか。なお、緑礬精は硫酸鉄で、媒染剤・還元剤・防腐剤・顔料として用いる。

「流人と非人」森永種雄　長崎奉行の記録　岩波新書
「乍恐以書付奉申上口上覚」　甲斐龍二氏所蔵
「諸用留」　甲斐龍二氏所蔵

竈門又太郎貞継道善

土屋公照

亀川の後背地にあたる羽室台地に、別府市では珍しい御霊社がある。この台地は、鎌倉時代から南北朝にかけて、この地を支配した竈門荘地頭職竈門氏の館があり、同氏一統の本拠地であったと伝えられている。

この御霊社は、享保年間に蝗の害を封じるため、近村の農民が、鎮西八郎為朝の霊を勧請したものであるが、実は、悲運な最後をとげたとされる竈門氏の怨霊を鎮めるため、竈門氏の墓地に建立されたものと考えられる。

羽室御霊社の裏手にある古塔群は、県の文化財に指定